

「自然と共生プラス心」の道

農家に生まれ、農家に育ち、農業に生きてきた私ですが、町政への不信を契機として、政治への道へ足を踏み込み、いまは2万5千人の町の首長として勤めさせて頂いて早10年を過ぎようとしている。いい町を作りたいの思い一筋に、その実現との戦いの10年とも言える。私のめざす町は、「ふるさと研究むら」である。それは人間にとって本当の幸せを感じる事の出来る「ふるさと」を作る事であり、その基本理念は「自然と共生プラス心」の町づくりである。「自然なくして人はなし、心なくして幸せはなし」である。

20世紀は人類史上にない急速な進歩を遂げてきた。しかしその裏では大変な自然環境の破壊を見過ごしてきた世紀とも言える。これからは人間も自然の中の一部である事を自覚して、人間の奢りを反省し、自然を征服するのではなく、自然と仲よく生きる知恵を求めるべきである。そして人間の本当の幸せとは何か、目に見える外の事ばかりでなく、人の心の内に目を向ける生き方を求めるべきではないか。私のめざす「ふるさと研究むら」構想は、人づくりを中心として循環型社会を復活するうちに、21世紀のモデル村を作る事である。つまり町全体が研究むらをめざして、人と知恵と技術を集結したいと考えている。

自然と共生については、外面的なものと、内面的なものに分けられる。外面的な現象としては広く地球環境の問題として国際的にとり上げられて、いまや環境重視に異を唱える人は少ない。私の町でも町民の意識改革が進み、ゴミ問題、太陽光発電、河川浄化運動、里山事業、炭焼き事業、有機農業、EM菌の活用、等々への取り組みが盛んである。

一方内面的な自然との共生の意識については非常に低い。たとえば健康問題と自然との共生を考えてみよう。今ではどこの家庭も冷暖房が完備され、子供達に思わぬ影響が表われている。人工の温度管理の中で毎日生活するが為に、自分の体温の調製機能が退化していると言われている。また極端な清潔主義が人間の細菌に対する抵抗力を弱くしている事も問題の一つである。かつて学校でのO・157の発生以来、学校給食の現場では異常と思われる程の神経の使い様

である。

この地球上には、人間も含めてあらゆる生物が、すばらしいバランスの上に造られている。そのバランスを壊してきたのは外ならぬ人間である。笑えない話がある。最近家庭の多くは洋式トイレの普及により、保育園、学校もその対応をしなければ、子供達が和式トイレが使えないと言う声がある。昔はトイレどころか、畑でしたくなると穴を掘って、草の葉でお尻を拭いた我々にとっては、考えられない子供が育ちつつあることである。

人間は文明の進歩と共に、人間の本能、適応能力を失いつつある。こうした生活が「生活習慣病」患者の増と合わせて、薬漬け社会による国民医療費の増大となっている。人には自然治癒力と言う、天から与えられた力が有る事を忘れ、ひたすら薬と医者に頼ると言う過保護体質と、自然との共生を忘れたがゆえの結果である。

人はこの世に生まれると、初めて自分で息をする。つまりこの時より自然との共生が始まる。呼吸はそのパイプ役となるのである。

臨済宗の中興の祖とといわれる「白隠禅師」は、「心は心を以って制する事は出来ない、息を以って心身を養え」の言葉を残されている。いま私は、「楊名時健康太極拳」への入門を切っ掛けとして、呼吸法と禅の道を模索して自分自身の人体実験を続行中である。

白隠禅師が言われる様に人間の心（煩悩）は心では制する事は出来ない、息（呼吸）によって心身を養う事によって制する事が出来ると教示し、呼吸法が人の心を正しくする根元であるとしている。

つまり禅とは神（天）と一体になることであり、人は自然との共生が出来た時が最も幸せを感じずる時なのではないか。

私はこれまで日本農業経営者連盟の一員として、ソ連、中国、北朝鮮等の社会主義国家の農業と、アメリカ、台湾、韓国等の資本主義国家の農業を調査してきた。そして社会主義でも、資本主義でもない第三の道はどんな道であろうかと模索をしてきた。今、その道は「自然と共生プラス心」の道であったと思っている。我が町はその実験の町として頑張っていきたい。

（愛知県美浜町長 齋藤宏一・さいとうこういち）